

<研究動向>

日本における外国人留学生の異文化適応研究の動向

原 華 耶

東亜大学留学生別科
genkaen@toua-u.ac.jp

《要 旨》

日本においては、外国人留学生の急増とともに、彼らの抱えている問題点や日本社会への適応問題がますます注目されるようになってきている。外国人留学生の異文化適応において様々な要因が複雑に絡み合い、異文化適応の問題が依然として深刻な課題である。

本研究では、日本における外国人留学生の変遷と現状を整理しながら、異文化適応研究の歴史および研究の動向を明らかにする。そして、異文化適応をとらえる上で示唆となり得る知見を提供する先行研究を概観し、異文化適応と関連する要因、重視される側面を整理し、その研究成果と課題をまとめる。さらに、これまでの研究の動向を把握した上で、問題点を指摘し、今後の方向性と可能性を探り出すことを試みる。

キーワード：外国人留学生，異文化適応，U型曲線，W型曲線，アイデンティティ

1. はじめに

近年、留学生の生活および異文化適応の研究は国際教育交流の中で非常に高い関心を集めてきている。外国人留学生としては、中国、韓国などのアジア諸国、そしてベトナムなどの東南アジア諸国を中心にアジア系民族が多く、全体の90%以上を占めている。それゆえ、外国人留学生といっても、それぞれの国の文化的背景も様々で一概とはいえない。さらに、同じ国の出身でも、各個体の中にも様々な個性があり、異文化適応というのは一つのパターンではない。筆者自身も日本で長期の留学を経験しており、日本文化への適応が留學生活の充実度、満足度に大きな影響を与えることを実感した。

異文化適応は、異文化に滞在する者が滞在国の文化を理解し、その文化における日常生活上

の適切な習慣を取り入れることとされている。外国人留学生は自文化から異文化へ移行するにあたって、学習・研究領域から、言語領域、対人関係領域、文化環境領域まで多岐にわたる。それぞれの領域において、身体的適応、心理的適応および社会文化的適応など様々な異文化適応の課題に直面している。

2. 日本における外国人留学生の推移と現状

外国人留学生数の推移をみると、1983年の10,428人から緩やかに増加し、1990年に前年より10,096人大きく増加し、41,347人まで一気に伸びた。その後再び緩やかに増え、1995年の阪神・淡路大震災の影響で、1996年、1997年の2年連続で来日留学生が減少したにもかかわらず、2003年に10万人計画を達成した。その後、出入国管理の審査方針が再び厳格

化された2006年と、東日本大震災と福島第一原発事故があった2011年などには落ち込む現象がみられる以外、基本的には順調に増加してきている。

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の調査¹によると、2018年5月1日現在の留学生数は298,980人²（前年比31,938人（12.0%増））となっている。男女別留学生数をみると、男性は167,269人、全体の55.9%を占めており、女性は131,711人、全体の44.1%を占めている。

出身国（地域）別留学生数をみると、中国の114,950人（38.4%）で最も多く、そしてベトナムの72,354人（24.2%）、ネパールの24,331人（8.1%）の順に続く。中国とベトナムからの留学生を合わせただけで、全留学生の占める割合は62.6%となっている（表1）。さらに、アジア地域からの留学生数をすべて合わせると

279,250人となり、全体の93.4%を占める（表2）。

また、日本学生支援機構調査最新のデータによると、在学段階別留学生数は日本語教育機関が最も多く、90,079人となっている。次いで、大学（学部）が84,857人、専修学校（専門課程）が67,475人、大学院が50,184人の順となっている。

1983年の外国人留学生の受入れ制度が実施されて以降、外国人留学生の急増期は主に3つの時期に分けられる。すなわち、①バブル期前後、②2000年代前半、③2010年代後半において外国人留学生の増加が目立つ。現在、中国、ベトナムをはじめアジアの留学生数は全体の90%以上を示しており、今後もこの傾向は続くと思われる。教育機関においては、日本語教育機関、大学（学部）、専修学校（専門課程）、大

表1 出身国（地域）別留学生数

国（地域）名	留学生数（人）	構成比（%）
中国	114,950	38.4
ベトナム	72,354	24.2
ネパール	24,331	8.1
韓国	17,012	5.7
台湾	9,524	3.2
スリランカ	8,329	2.8
インドネシア	6,277	2.1
ミャンマー	5,928	2.0
タイ	3,962	1.3
バングラデシュ	3,640	1.2
モンゴル	3,124	1.0
マレーシア	3,094	1.0
その他	26,455	8.8
計	298,980	100

出所：日本学生支援機構（2018）を基に筆者作成³

表2 出身地域別留学生数

地域名	留学生数（人）	構成比（%）
アジア	279,250	93.4
その他	19,730	6.6
計	298,980	100

出所：日本学生支援機構（2018）を基に筆者作成

表3 在学段階別留学生数

教育機関	人数(人)	構成比(%)
日本語教育機関 ⁴	90,079	30.1
大学(学部)	84,857	28.4
専修学校(専門課程)	67,475	22.6
大学院	50,184	16.8
準備教育課程	3,436	1.1
短期大学	2,439	0.8
高等専門学校	510	0.2
計	298,980	100

出所：日本学生支援機構(2018)を基に筆者作成

学院の4機関でいずれも5万人を超え、合計292,595人で、外国人留学生全体の97.9%を占めていることがわかる。これらの機関、特に日本語教育機関におけるアジア系を中心とする外国人留学生の抱えている問題は喫緊の課題であるとうかがえる。

3. 異文化適応

3.1 異文化適応の概念

適応は、異文化と接触する時によく用いられる概念である。適応とは、個人と環境との関係がその人の生活にとって快適であり、緊張やストレスにさらされていない状態やそれを旨とする過程である。人間が適応すべき環境には大きく3種類があるといわれる。自然への適応、社会的適応、心理的適応である。異文化適応(acclimation)は心理学では異文化環境におかれた個人が異文化接触により表す心身的変化とみなし研究されている。異文化環境の中で、異文化に反発し抵抗することもあれば、時間の

経過につれて異文化に魅力され自らを同化し、適応していくこともある。

異文化適応は文化変容の結果として表れるものである。文化変容とは、異なる文化を有する個人が片方あるいは両方の文化様式に対して継続的な接触を通じて変化を受ける現象を指している。異文化間心理学では、異なる文化が会うことにより生じる文化の変容を文化変容とし、文化変容を経験した個人が心理面や行動面において変化することを異文化適応と呼んでいる。

異文化と接触する時に、ホスト国に対する態度と母国文化に対する態度という2つの軸が想定され、文化受容態度として四類型があると提示されている(Berry, Kim, Power, Young & Bujaki, 1989)。それは「統合(integration)」、「同化(assimilation)」、「分離(separation)」、「周辺化(marginalization)」である。移住者がその文化的アイデンティティを保持するか喪失するか、受け入れ側との関係が良いか悪いかにより異なる結果を、文化変容のモデルを表4

表4 文化変容態度の四類型(参入者側)

	母国の伝統文化や母国の人との関係維持を重視する	母国の伝統文化や母国の人との関係維持を重視しない
異文化や異文化の人との関係維持を重視する	統合	同化
異文化や異文化の人との関係維持を重視しない	分離	周辺化

出所：Berry(2005)を基に筆者作成

に示している (Berry, 2005)。

「統合」は、母国の文化を維持しつつホスト国の文化との接触も望むこととされている。「同化」は、元々保持していた自文化を維持せず、ホスト国の文化との交流のみを望むこととされている。「分離」は、母国の文化のみ維持し、ホスト国の文化との接触を回避することとされている。「周辺化」は、自文化とホスト国の文化の両方に消極的で、無関心な状態であるとされ、社会の周辺で生きることを強いられる。この場合には、参入者側の人権は侵害される恐れがある。「分離」や「周辺化」で見られる文化受容態度は異文化接触過程においてストレスや行動変化に影響を与え、社会への適応にも大きく影響する (Berry, 1992)。このうち、「統合」は母国文化とホスト国の文化との同一化がともに高い状態にあることを示し、最も良い異文化適応へとつながる文化変容態度とされる。以上のような異文化適応に対する考え方は、個人がいかにか新しい環境に適応していくかという視点に立つものと考えられる。しかし、いくつかの課題も残されている。

異文化適応に関する研究が盛んになるにつれ、その概念や理論がそれぞれの研究者によって提唱されてきた。しかし、研究者間で一致した合意がみられない。高井 (1989) によれば、ある個人が自分の生まれ育った社会環境から離れて、異なった新たな環境に次第になれてゆく過程は異文化適応であり、最も大切な要因の一つは時間の経過であると指摘した。譚・渡邊・今野 (2011) によると、異文化適応には、適応を調和のとれた好ましい状態としてとらえている静的なものや適応を過程としてとらえている動的なものがある。「個人が異文化で心身ともに概ね健康で、強度な緊張やストレスにさらされていない状態」と定義している。

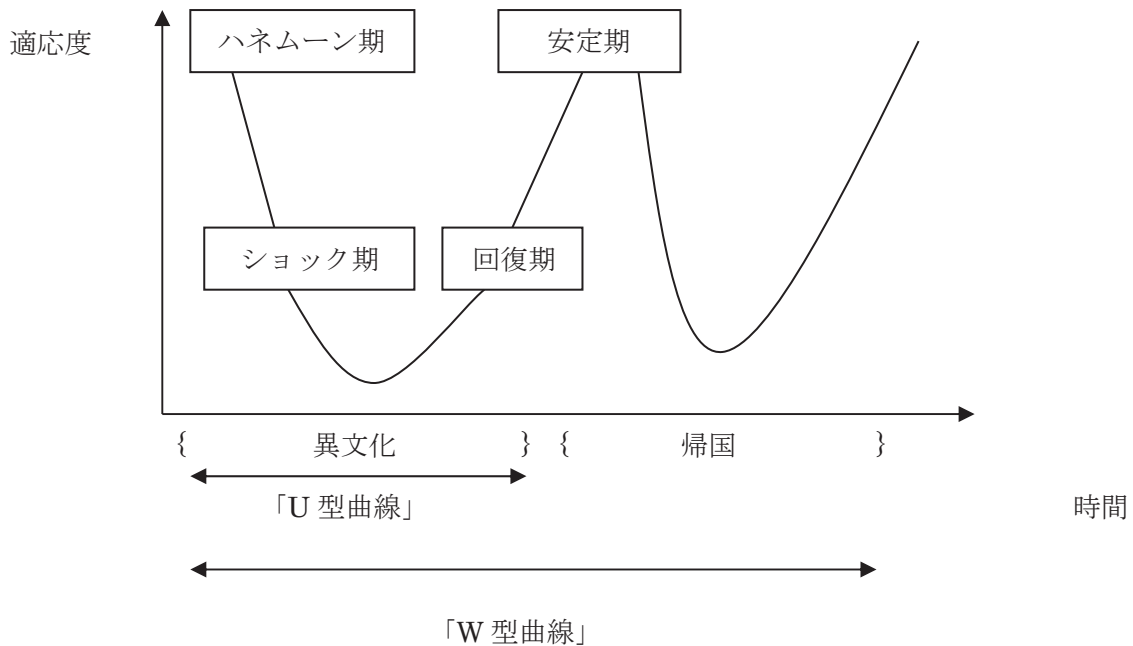
鈴木 (2012) によると、異文化適応とは、「個人が新しい環境 (異文化やそのメンバー) との間に適切な関係を維持し、心理的な安定が保たれている状態、あるいはそのような状態を目指す過程」であるとしている。そして、Ward & Rana-Deuba (1999) によれば、適応の内容によって「心理的適応 (Psychological

adjustment)」と「社会文化的適応 (Sociocultural adjustment)」という2つに分類されるとしている。前者の心理的適応は個人の心理的健康や身体的健康状態を指している。後者の社会文化的適応は新しい環境に適応できる能力を指している。したがって、両者の間には相関関係も認められ、社会文化的適応が心理的適応に影響を及ぼす傾向があると指摘される。本研究ではこれらを踏まえた上で異文化適応の定義について再検討する。

3.2 異文化適応の過程に関する先行研究

異文化適応が時間の経過につれて常に変化するものであることを最初に論じたのはリスガード (Lysgaard, S., 1955) である。彼は200人のノルウェー人のフルブライト留学生に面接した結果に基づいて、「U型曲線」仮説を提出した。異文化への適応過程を以下のようにとらえた。最初の段階はハネムーン期といわれ、環境のすべてが新しく楽観的に接することができる段階である。しかし、時間がたつにつれて、第2段階のショック期に入ってくる。この段階では新しい文化に敵対心を持つことや同じ文化からきた人とのコミュニケーションが増える段階である。第3段階の回復期では、言語や周りの環境にも慣れて、徐々に文化変容がみられるようになる。最終段階の安定期では、異文化適応がほぼ完成し、新しい環境が受け入れられるようになり、異文化環境を楽しむ段階である。つまり、異文化に移った当初の表面的で局限された適応から、様々な困難に直面する適応の危機を経て、統合された真の適応へと段階的に進むといったものである。さらに、「U型曲線」の横軸である時間経過を自文化への再帰段階にまで延長したのが「W型曲線」である。この仮説は1963年にガルホーンら (Gullhorn, J. T. & Gullhorn, J. E.) によって提唱された。それは、ある程度異文化に適応した後に帰国すると、自文化において同じような再適応のプロセスを踏む。つまり、「U型曲線」は異文化に入り適応するまでの心理状態を示し、さらに、自文化に戻った時の心理状態を加えたものは「W型曲線」である (図1)。しかし、両モデルに

図1 「U型曲線」と「W型曲線」



出所：Lysgaard, S. (1955), Gullhorn, J. T. & Gullhorn, J. E (1963) を基に筆者作成

対して、モデルが単一で、変化を具体的に示していない（星野，1980a）ことや、時間、経験の主観的側面を考慮していないことなど、批判する声も相次いでいる。

異文化適応の過程について、Oberg (1960) ではカルチャーショックには個人差があることを指摘した上で、「蜜月期」，「敵対期」，「回復期」，「適応期」の4つの段階⁵があると提唱する。「蜜月期」では、新しい環境に入ったことをうれしく思い、新しい文化に魅力され、興奮・憧れの時期である。これらの気持ちが少し落ち着いてくると、様々な現実的問題に直面し、自分を取り巻く環境の中で適切な行動は何なのか、困難を如何に乗り越えるかの意識が強まる。被拒絶感やさらに敵意が生まれ「敵対期」となる。それから、「回復期」では、異文化の環境で言語や文化、生活習慣に慣れ、それまでに理解できなかったことを理解できるようになり、自文化から異文化へと移行する。この時期は、新しい環境に適応し始める時期ともいえる。やがて異文化を客観的に捉え、自ら積極的に現地の人々に合わせ、現地社会の習慣・文化を受け入れ、心理的バランスを取れるのは「適応期」である。

アドラー (Adler, 1975) の位相モデル仮説も異文化適応の研究において重要な理論である。5つの位相という言葉を用い認知、感情、行動の面からその心理過程が解釈された。彼は適応過程を「異文化接触期」，「自己崩壊期」，「自己統合期」，「自律期」，「独立期」の5つの段階に分けている。自文化の閉鎖から異文化的差異に興味を示すのは第一段階の「異文化接触期」である。この時期には異なる環境へ移行し、積極的に新しいことに取り組んでいく姿勢が多くみられるが、挫折を経験することも少なくない。第二段階の「自己崩壊期」では、身近のできごとから孤独感、無力感、喪失感に襲われ、第一段階のプラス思考から自信を失い、否定的な心理状態に陥ることが多くなる。第三段階の「自己統合期」は、異文化に対する否定的な行動は自己主張と自尊心の成長によるものであると認識し、いかに異文化を受け入れ、適応していくかについて考え直す時期である。第四段階の「自律期」は文化の共通点と相違点をありのままに受け入れ、共通点で共感が生まれ、相違点でもプラスと捉え、現地の人々と一体感を持って積極的に行動できる時期である。最後の「独立期」では異文化環境で暮らす中で、自

分のやりがいや目標、夢を描き、自分の存在意義を見出す段階である。

近藤（1981）では、異文化適応の時間的なプロセスを「拒否的」、「攻撃的」、「消極的」、「積極的」、「迎合的」の五つのカテゴリに分類することができる」と述べている。異文化に接触初期には拒否的、攻撃的なパターンが多くみられるが、中期においては積極的、消極的のいずれかに移行する現象が目立つ。これらの異文化適応の過程では一般に、順序で経過するものがほとんどであるが、途中で条件が変わると経過の順序が乱れたり逆戻したり多様な変化も見られた。

4. 日本における外国人留学生の異文化適応に関する研究

4.1 異文化適応研究のはじまり

異文化適応研究は文化人類学、社会学および心理学においてそれぞれ行われてきたが、文化人類学と社会学の分野では、集団レベルの特性や傾向の把握が主流であるのに対して、心理学の分野においては個人に焦点を当てるのが特徴である（劉，服部，2012）。20世紀初頭には、米国において精神医学者による移民についての事例の報告・調査などが行われ、これは異文化適応研究のはじまりとして知られるようになる。研究成果の蓄積が最も多いのはアメリカで、大きく3つの領域に分けられる。まず、1番目の領域は、留学生が抱えている適応上の困難点を明らかにする研究であり、これらは制度面での改善や留学生に対する援助・サポートを効果的に行うことを目的としている。具体的には学習・研究の側面、個人の側面、社会・文化的側面から分析を行ってきた。そして2番目の領域は、適応過程を曲線や位相モデルで示す記述的アプローチである。代表的なものは、リスターの「U型曲線」、ガルホーンらの「W型曲線」、アドラーの適応過程の段階説などがあげられる。3番目の領域は、年齢や出身国、あるいは言語の堪能さといった留学生の個人要因、また社会的相互作用の質や量などの状況的要因、そして人格的要因が適応とどのような関

係にあるかが検討されてきた。

異文化適応に関する研究は米国を中心に行われ、在日留学生を支援する際に多くの示唆を提示している。第二次世界大戦後、米国に留学する外国人留学生の増加や、外国企業からの滞在員とその家族の増加、あるいは逆に米国から海外へ赴く人々が増加したきっかけで、研究のテーマとして多くの関心を集めるようになった（高橋，1983，箕浦，1987）。

4.2 日本における外国人留学生の異文化適応研究

日本における外国人留学生の異文化適応に関する研究の先駆けは、岩男・萩原（1987）による留学生の対日イメージ研究である（殷・青木，2017）⁶。日本における外国人留学生の不適応の実態を明らかにする研究が主に日常生活困難とストレス、対人関係上の問題、対日態度・日本人イメージの側面から行われてきている。まず日常生活の困難とストレスに関するものである。田中・田畑（1991）では、日本にいる外国人留学生の日常生活における悩みや困難として、日本語の困難、勉強面の困難、経済の困難があると報告されている。松原・石隈（1993）は、外国人留学生からの相談内容について、言語の問題、経済の問題、生活の問題、健康の問題、修学の問題、人間関係の問題、文化の問題の順で多かったことを述べている。対人関係上の問題として、行動上の困難や問題点があげられるほか、社会的困難度が高いことが述べられている。また、対日態度および日本人イメージに関しては、日本・日本人に対する態度では、アジア系学生が批判的な態度を有していること、日本人イメージでは、日本語がよりできるものほど日本人の親和性を低く評価する傾向がみられる（岩男・萩原，1988）。したがって、外国人留学生は言葉、経済、対人関係など様々な領域で困難な問題を抱えていることが明らかになった。

これらの問題の適応の障害として生活費、過密な人口、食事、プライバシーの欠如、日本人の習慣、日本人とのコミュニケーション、日本人の外国人に対する態度、日本人の考え方など

をあげている。この中で、特に対人関係にかかわる項目への注目が高いと述べている（岩男・萩原, 1988）。高井（1989）はそれまでの日本の留学生研究をレビューし、異文化適応の最大の障害は明らかに人間関係であるとしている。留学生の異文化適応にとって対人関係が重要な役割を果たすことが示唆されており、対人関係が円滑であるほど、実際に適応が促進されるのであろうかについて十分な検討が必要になってくる。

また、岩男・萩原（1988, 1997）では、出身地域を個人属性によって、留学生の間に大きな違いがあると述べ、適応を直接測定するのではなく、外国人留学生の日本に対する認知の変化に焦点を当てた。その後、外国人留学生の増加に伴い、彼らの異文化適応に関する研究も盛んに行われるようになった。田中・田畑（1991）では、異文化の実態について、言語の問題、修学の問題、経済面の問題および対人関係上の問題など抱えていることを指摘した。

日本における外国人留学生を対象とした異文化研究を概観すると、滞在国に対して抱く態度やイメージを扱った研究（岩男・萩原, 1988）、生活ストレスや適応の実態を描き出すことを目的とする研究（徐・蔭山, 1994）、ソーシャルサポートやソーシャルスキル、友人関係に焦点を当てる研究（田中, 1993; 周, 1994, 1995a, 1995b）、自文化や日本文化に対する態度と適応の関連に関する研究（井上・伊藤, 1995, 1997）、外国人留学生の心身の健康などの心理的適応側面の研究（周, 1995a; 吉, 1999）、心

身の健康に加えて学習・研究、日本文化などの社会文化的適応側面をあわせた研究（岩崎, 1998; 水野・石隈, 1998）など、日本文化、研究、生活、対人関係領域を取り上げて様々な視点から研究が行われてきた。しかし、葛（1999）は個々の留学生が抱える問題については明らかになりつつあるものの、留学生の出身地域による適応度に関する調査はあまり行われていないことを指摘した。これまでの先行研究の理論や知見をどの程度まで適応できるかについては検討する必要がある。

日本における外国人留学生の増加に伴い、在日留学生の異文化適応に関する問題が注目されるようになってきた。表5に示すように、その研究内容は留学生の対日態度・イメージ調査から始まり、異文化接触に関するもの、不適応の原因を究明するものがある。また、学業面、経済面、精神面、対人関係など、様々な側面での困難を扱ったもの、異文化適応に影響する要因を検討するもの、異文化適応の促進効果が期待されるソーシャル・スキル、ソーシャル・サポートに関するものなど多岐にわたっている。さらに、出身地域による文化背景の違いによって、適応の促進に有効な要因が異なることが示されている。

また、日本語能力と異文化適応の関係についての先行研究もあった。コミュニケーションにおける困難については、語学力不足が大きな原因としてあげられる。外国語能力の高低が、円滑なコミュニケーションに影響を与えると指摘された（葛, 2003; 湯, 2004）。

表5 日本における外国人留学生の異文化適応に関する実態調査

研究内容	研究者
外国人留学生の対日態度・日本人イメージ調査	岩男・萩原（1988）、山崎（1993）、山崎（1996）、徐（1996）、横林（2001）
異文化接触に関する研究	江村（1993）、浅野（1996）、佐々木（1997）、神谷・中川（2007）、横林・羅（2010）
不適応の原因を究明する研究	田中・田畑（1991）、上原（1992）、岡（1992）、田中・横田（1992）、松原・石隈（1993）、岡・深田（1994）、徐・蔭山（1994）、福田（1995）、井上・谷・土屋（1997）、鈴木（1997）

出所：譚・渡邊・今野（2011）、中野・奥西・田中（2015）をもとに筆者作成

5. おわりに

日本における外国人留学生の異文化適応に対しては、的確な現状分析を踏まえた上で、文化社会の特性も考慮した現実的な調査および研究が、さらに進むことが期待される。まず第一歩として、過去の研究業績をたどる作業は不可欠である。日本において、この分野の研究の始まりは、岩男・萩原（1987）による留学生の対日イメージ研究であった。その後、様々な側面に焦点を当て、外国人留学生に関する異文化適応が研究されてきている。

日本における外国人留学生の異文化適応研究は主に大学生を取り上げて行われてきている。つまり、留学生対象の研究のほとんどは、大学に在籍する留学生に限られている。しかしながら、現時点では留学生数が最も多く、全留学生の3割程度を占める日本語教育機関に在籍する留学生を対象とする研究は極めて少ない。これは、日本語教育機関に在籍する留学生は一時的な存在としてみられ、社会的な関心が低いことが一因と考えられる。日本語学校などの教育機関は大学進学のための予備校的存在となってい

る（垣渕，1993）。これらの教育機関の在籍期間は来日初期段階であり、その後の異文化適応に大きく影響を与え、最も重要な時期ともいえるだろう。したがって、日本語教育機関における外国人留学生の異文化適応問題を視野に入れて検討することは重要な意義がある。

また、横断的・縦断的研究という観点からみると、横断的研究が圧倒的に多く、縦断的研究があるとしても2回までで終わってしまうことが多い（岩男・萩原，1977，1978，1979；山本，1986；Hicks，1988）。しかし、日本における外国人留学生は異文化に適応していく過程に基づくプロセスを解明するには、縦断的研究がより適切である。異文化への適応や異国の生活に対する満足度は、異文化の中での生活期間が長くなるのに応じて変動しながら進行する。外国人留学生が日本で生活している間にどのような適応過程がみられるか、また適応に影響する要因と適応過程の関連を解明するために、縦断的研究は極めて重要であると考えられる。したがって、縦断的研究を行うにあたって、より明確で妥当な結果を得るために、調査実施の回数も検討する精密な追跡調査が必要であろう。

参考文献：

- Adler, P. S. (1975) The transitional experience : An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*
- Berry, J.W. Kim, U. ,Power, S.,Young, M., & Bujaki,M.(1989) Acculturation attitudes in plural societies.*Applied Psychology:An International Review*, 38, 15-206
- Berry,J.W.(1992) Acculturation and adaptation in a new society. *International Migration*, 30, 69-85
- Berry,J.W.(2005) Acculturation:Living successfully in two cultures.*International Journal of Intercultural Relations*, 29, 697-712
- Gullahorn,J.T., Gullahorn,J.E.(1963) An extension of the u-curve hypothesis. *Journal of Social Issues*,19(3),33-47
- Hicks, J. E. (1988) Studies on the adjustment of foreign students in Japan:With focus on interpersonal relations. Doctoral dissertation, Faculty of Education, Hiroshima University
- Lysgaard, S. (1955) Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States.*International Social Science Bulletin*, 7 (1), 45-51
- Oberg, C. (1960) Culture shock:Adjustment to new cultural environments.*Practical Anthropology*, 7, 170-179
- Ward, C. & Rana-Deuba, R.(1999) Acculturation and adaptation revisited.*Journal of*

- Crass-cultural Psychology. 30, 422-442
- 浅野慎一 (1996) 「アジア人留学生・就学生の生活と文化受容 (3)」神戸大学発達学部研究紀要, 4 (1), 109-138
- 池田理知子 (2001) 「カルチャー・ショックと適応理論の再考察」『社会科学ジャーナル』47
- 伊佐雅子 (2000) 『女性の帰国適応問題の研究—異文化受容と帰国適応問題の実証的研究—』多賀出版
- 井上孝代・伊藤武彦 (1995) 「来日1年目の留学生の異文化適応と健康：質問紙調査と異文化間カウンセリングの事例から」異文化間教育, 9, 128-142
- 井上孝代・伊藤武彦 (1997) 「留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康」心理学研究, 68, 298-304
- 井上孝代・谷和明・土屋順一 (1997) 「国費学部留学生の中途退学の実態：留学生の発達援助—不適応の実態と対応」多賀出版, 13-28
- 岩男寿美子・萩原滋 (1977a) 「在日留学生の対日イメージ (1)：第一次調査資料と若干の考察」慶応義塾大学新聞研究所年報, 8, 9-34
- 岩男寿美子・萩原滋 (1977b) 「在日留学生の対日イメージ (2)：SDプロフィールの検討」慶応義塾大学新聞研究所年報, 9, 27-72
- 岩男寿美子・萩原滋 (1978a) 「在日留学生の対日イメージ (3)：滞日期間に伴う変化」慶応義塾大学新聞研究所年報, 10, 15-29
- 岩男寿美子・萩原滋 (1978b) 「在日留学生の対日イメージ (4)：ケース・スタディ」慶応義塾大学新聞研究所年報, 11, 17-29
- 岩男寿美子・萩原滋 (1979) 「在日留学生の対日イメージ (5)：パネル・スタディ」慶応義塾大学新聞研究所年報, 13, 21-50
- 岩男寿美子・萩原滋 (1987a) 「在日留学生の対日イメージ (6)：10年後の再調査」慶応義塾大学新聞研究所年報, 13, 21-50
- 岩男寿美子・萩原滋 (1987) 『留学生が見た日本：10年目の魅力と批判』サイマル出版会
- 岩男寿美子・萩原滋 (1988) 『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析—』勁草書房
- 岩男寿美子・萩原滋 (1997) 「在日留学生の対日イメージ (12) 第3次調査 (1995年)の枠組みと結果の概要」慶応義塾大学新聞研究所年報 (47), 1-20
- 岩男寿美子・萩原滋 (1997) 「在日留学生の対日イメージ (13) 滞日経験に関する評価の経年変化」慶応義塾大学新聞研究所年報 (47), 21-41
- 岩崎久美子 (1998) 「日本における留学生の適応—適応モデルの妥当性と出身地域別相違—」産業カウンセリング研究, 2, 11-20
- 殷夢牽・青木紀久代 (2017) 「外国人中国人留学生の異文化適応に関する質的研究」お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要 (19), 49-59
- 上原麻子 (1992) 「外国人留学生の日本語上達と適応に関する基礎的研究」平成2年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 江村裕文 (1993) 「留学生の異文化適応」法政大学教養部紀要, 89, 1-11
- 岡益巳 (1992) 「中国人私費留学生に関する実態調査—岡山県の場合」岡山大学産業経営研究会研究報告書, 27, 1-26
- 岡益巳・深田博己 (1994) 「中国人留学生と就学生の意識」岡山大学経済学会雑誌, 26 (1), 1-28
- 垣渕洋一 (1993) 「日本語学校に在籍する就学生・留学生の精神健康に関する研究」筑波大学大学院博士課程医学研究科 博士号論文
- 葛文綺 (1999) 「留学生の異文化適応に関する研究—来日目的, 対日イメージと適応度との関連を中心に—」名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 287-297
- 葛文綺 (2003) 「中国人留学生の適応度に影響を与える個人属性について」学生相談研究, 23, 274-283
- 神谷順子・中川かず子 (2007) 「異文化接触による相互の意識変容に関する研究—留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方

- 向的効果一」北海学園大学学園論集, 134, 1-17
- 吉沅洪 (1999) 「中国人留学生のピリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応に与える影響」学生相談研究, 20, 9-18
- 近藤裕 (1981) 『カルチャー・ショックの心理—異文化とつきあうために』創元社
- 鈴木康明 (1997) 「相談活動からみた不適応の諸相: 留学生の発達援助—不適応の実態と対応」多賀出版, 29-45
- 高井次郎 (1989) 「在日外国人留学生の適応研究の総括」名古屋大学教育学部紀要: 教育心理学科, 36, 139-147
- 高橋哲郎 (1983) 「文化葛藤と病い」飯田真他編『治療と文化』岩波書店, 209-236
- 田中共子・田畑佳則 (1991) 「外国人留学生の日本生活における問題—留学の動機および満足度との関係—」中国四国教育学会 教育学研究紀要, 37 (1), 364-369
- 田中共子・横田雅弘 (1992) 「在日留学生の居住形態とストレス」学生相談研究, 13, 51-59
- 田中共子 (1993) 「留学生」相談の霊異記学生相談研究, 4, 73-84
- 中野祥子・奥野有理・田中共子 (2015) 「在日 ムスリス 留学生適応に関する研究の動向」岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第39号, 153-167
- 箕浦康子 (1987) 「異文化接触研究の諸相」文化と人間の会編『異文化とのかかわり』川島書店, 7-36
- 近藤裕 (1981) 『カルチャー・ショックの心理—異文化とつきあうために』創元社
- 佐々木陽子 (1997) 「留学生の適応と日本人学生との親密化—留学生への質問紙調査をもとに」熊本大学留学生センター紀要, 1, 217-240
- 徐光興・蔭山英順 (1994) 「在日中国人留学生の適応に関する実態と問題」名古屋大学教育学部紀要, 41, 39-47
- 徐光興 (1996) 「帰国留学生の対日イメージと態度に関する研究」名古屋大学教育学部紀要, 43, 87-95
- 徐光興 (1998) 「在日留学生の異文化適応過程とメンタルヘルスに関する研究」名古屋大学教育心理学科博士論文甲第 4161 号
- 周玉慧 (1994) 「在日中国系留学生にたいするソーシャルサポートの次元—必要とするサポート, 知覚されたサポート, 実行されたサポートの間の関係—」社会心理学研究, 9, 105-113
- 周玉慧 (1995a) 「ソーシャルサポートの効果に関する拡張マッチング仮説による検討—在日中国系留学生を対象として」社会心理学研究, 10, 196-207
- 周玉慧 (1995b) 「受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討—在日中国系留学生を対象として」心理学研究, 66, 33-40
- 高井次郎 (1989) 「在日外国人留学生の適応研究の概括」名古屋大学教育学部紀要
- 譚紅艷・渡邊勉・今野裕一 (2011) 「在日外国人留学生の異文化適応に関する心理学的研究の展望」目白大学心理学研究 第7号, 95-114
- 鈴木一代 (2012) 「異文化間心理学へのエントランス」おうふう
- 福田一彦 (1995) 「外国人留学生の適応障害とその援助」全国大会メンタルヘルス研究会報告書, 17, 103-105
- 星野命 (1980a) 「カルチャーショック」『現代のエスプリ』161, 5-29
- 星野命 (1985) 『教育と医学』「カルチャー・ショックと学習」慶応通信 26-41
- 星野命 (2010) 『異文化間教育・異文化間心理学』北樹出版
- 松原達哉・石隈利紀 (1993) 「外国人留学生相談の実態」カウンセリング研究, 26 (2), 146-155
- 水野治久・石隈利紀 (1998) 「アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究」カウンセリング研究, 31 (1), 1-9
- 山崎瑞紀 (1993) 「アジア留学生の対日態度の形成要因に関する研究」心理学研究, 64, 215-223
- 山崎瑞紀 (1996) 「アジア出身の留学生及び就学生の日本観」学術研究—研究心理学編

- 一, 早稲田大学教育学部, 44, 41-49
- 山本多喜司 (1986) 「異文化環境への適応に関する環境心理学研究」昭和60年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 湯玉梅 (2004) 「在日中国人留学生の異文化適応過程に関する研究—対人行動上の困難の視点から—」国際文化研究紀要, 10, 293-328
- 横林宇世 (2001) 「地域・大学の規模による留学生と日本人学生の認知差—留学生の異文化適応要因の観点から—」国際言語文化研究, 7, 109-122
- 横林宇世・羅明坤 (2010) 「日中異文化接触場面における意識調査：中国人大学生の場合」西南女学院大学紀要, 14, 147-162
- 李正姫・田中共子 (2011) 「海外移民の文化受容態度とアイデンティティ研究に見る在日コリアン研究への示唆 (1)：岡山学院大学院社会文化科学研究科紀要, 第32号, 123-137
- 劉音・服部環 (2012) 「在日中華系留学生における異文化適応の促進要因について」筑波大学心理学研究, 43, 9-14
- 渡辺文夫 (1995) 『異文化接触の心理学：その現状と理論』川島書店

(Endnotes)

- 1 表1, 表2, 表3は2018年5月1日現在の最新データである。
- 2 2014年度より高等教育機関および日本語教育機関における総数を表している。
- 3 留学生数3,000人以上, 上位12カ国のデータを示している。
- 4 日本語教育機関は大学・短期大学が設置する留学生日本語別科と日本語学校の2種類に分かれる。
- 5 蜜月段階 (honeymoon stage), 拒否段階 (rejection stage), 適応移行段階 (beginning of adjustment stage), 適応段階 (adjustment stage) の4段階の表現方法もある。
- 6 留学生, あるいは日本語学習者の日本 (異文化) 適応については, 1970年代後半から岩男寿美子と萩原滋によってなされた留学生の対日イメージ研究が有名である。しかし, 80年代までは, 日本の異文化関係研究者の関心の中心は日本人帰国子女の問題に集中しており, 留学生を扱った研究が増加するのは1980年代後半からである。